



大阪市立美術館紀要

第13号

大阪市立美術館紀要

第十三号

◆ 目次 ◆

報告

特別陳列「橋本コレクション中国書画」

記念シンポジウム「コレクター―橋本末吉が拓いた地平」について……………弓野 隆之…3

講演

橋本末吉について……………橋本 太乙…9

論文

藍瑛「萸目喬松図」について

―題賛と内容および表現形式の分析―……………西尾 歩…21

謝時臣筆「華山仙掌図」について

―旅行文化と名勝山水図との関わりをめぐる一考察―……………植松 瑞希…41

花卉画家の山水図

―吳昌碩「雪山飛瀑図」(橋本コレクション)について―……………吳 孟 晋…57

座談会記録……………73

論文

田村直翁筆「架鷹図押絵貼屏風」(大阪市立美術館蔵)について……………知念 理…85

研究ノート

個人蔵 伝俵屋宗達筆 《扇面散貼付屏風》について……………大竹 悦子…105

論文

U・A・カザールとコレクション……………土井久美子 1

報告

特別陳列「橋本コレクション 中国書画」

記念シンポジウム「コレクター橋本末吉が拓いた地平」について

弓野隆之

大阪市立美術館では特別陳列「橋本コレクション 中国書画」を、二〇一二年七月二十八日（土）から九月二日（日）にかけて、三十二日間にわたり開催した。またこれに併せて、記念シンポジウム「コレクター橋本末吉が拓いた地平」を開幕日に挙行了した。

橋本末吉（一九〇二—一九九一）氏は、東京に生まれ、大蔵省から実業界に入り、日本アルコール販売株式会社などの役員・社長を歴任した人物である。戦後の動乱期に桑名鉄城旧蔵の中国明清書画に着目して、その優品を多数購求したことにより、コレクションの骨格が形成された。以来、大阪高槻の自宅に八百点余りにのぼる作品を収集した。その範囲は明清兩朝を網羅するが、明では浙派や明末の奇想派の作品、清では康熙・乾隆年間の諸作品などに特色があり、さらにそれまであまり顧みられることのなかった来船画人の作品や近現代の書画にも及んでいる。また、自宅に若い研究者を集めて自己の所蔵品を見せることを惜しまず、多くの学者を裨益した功績も非常に大きい。

昨年度二〇一一年は、辛亥革命から百年にあたっていた。清朝の崩壊、中華民国の成立という混乱期には多数の中国文物が海外に流

出した。この時期に日本にもたらされた作品によって、京都国立博物館・澄懷堂美術館・黒川古文化研究所・藤井斉成会有鄰館そして大阪市立美術館などに所蔵される中国書画コレクションの中核が形成された。これに続いて、大和文嘉館・泉屋博古館・観峰館・和泉市久保惣記念美術館に収蔵されるコレクションが収集された。そこで、関西の中国書画を所蔵するこれら九館の学芸員は「関西中国書画コレクション研究会」を立ち上げ、二〇一二年にかけ、連携して十六の中国書画展を各館で企画開催した。

橋本コレクションも、現在は渋谷区立松濤美術館に一括寄託されているものの、関西で蒐集された一大コレクションである。昨年度にこそ間に合わなかったが、その名品を関西で展覧したいという願いが漸く叶うことになった。そして御所蔵者の橋本太乙氏、松濤美術館学芸員の味岡義人氏のご協力と、京都大学名誉教授曾布川寛先生のご助言により、優品二〇〇件を精選して展覧することとなったのである。これほどの大規模な公開は、地元大阪で初めてのことであり、大きな反響を呼ぶこととなった。出品作品は後掲の一覧表をご参照いただきたい。

シンポジウムは、本館主催、関西中国書画コレクション研究会の協力により、一階講演会室で行われた。御令孫の橋本太乙氏には、末吉氏の人生やお人柄について、ご家族でしか知りえない貴重なお話を賜った。味岡氏からは、コレクションの中核である桑名鐵城旧蔵品についてご講演いただいた。また、三人の若手研究者からは、個別作品について最新の研究成果の発表があった。そして最後に奈良大学名誉教授・古原宏伸先生をはじめ、橋本末吉氏の警咳に接した学者、コレクターの方々にお集りいただいて、座談会という形で往時の様子をお伺いすることができた。

ここに掲載する諸稿は、本シンポジウムの報告である。コレクションが残ること自体なかなか難しいが、コレクターに関する資料が残ることはさらに稀少である。この報告が橋本末吉氏の顕彰にやささかでもお役に立てばと願っている。また、そのコレクションにより、中国書画研究がいつそう進展するものと信じている。

なお味岡氏の講演については、同氏「橋本コレクションと桑名コレクション」(『美術フォーラム』二六号、二〇一二年一月)にまとめられているので、参照されたい。

(大阪市立美術館学芸課長代理)

記念シンポジウム「コレクター橋本末吉が拓いた地平」
プログラム

開会辞

篠雅廣(大阪市立美術館館長)

一〇:三〇—一〇:四〇

第一部 講演

橋本末吉について

橋本太乙氏(橋本末吉氏令孫)

橋本コレクションと桑名鐵城

味岡義人氏(渋谷区立松濤美術館学芸員)

一〇:四〇—一二:〇〇

第二部 研究発表

謝時臣「華山仙掌図」について

—名山図の伝統と明代旅遊文化—

植松瑞希氏(大和文華館学芸員)

藍瑛「莼目喬松図」について

—表現形式と題賛の分析から—

西尾歩氏(立命館大学非常勤講師)

呉昌碩の山水図について

—日本人コレクターの視点から—

呉孟晋氏(京都国立博物館研究員)

司会・宇佐美文理氏(京都大学教授)

一三:〇〇—一四:四五

第三部 座談会

古原宏伸氏(奈良大学名誉教授)

山岡泰造氏(関西大学名誉教授)

尾崎蒼石氏(日展委嘱・日本篆刻家協会理事長)

曾布川寛氏(京都大学名誉教授)

西上実氏(京都国立博物館名誉館員)

司会・弓野隆之(大阪市立美術館学芸課長代理)

一五:〇〇—一六:二〇

閉会辞

守屋雅史(大阪市立美術館学芸課長)

一六:二〇—一六:三〇

特別陳列 橋本コレクション中国書画 出品目録

2012年7月28日(土) - 9月2日(日) 大阪市立美術館

	作者名	生卒	作品名	制作年	展期
一	呉昌碩	1844-1927	篆書「師古軒」	民国5年(1916)	通
1	辺文進	1356頃-1428頃	柏鷹図	宣徳2年(1434)	* 1
2	鄭文英	?-1434-?	山水人物図		* 2
3	石鋭	15 c 中期	探花図		後
4	張弼	1425-1487	草書王珪七律詩		後
5	周臣	1450頃-1535	風雨婦舟図		後
6	周臣	1450頃-1535	高士觀瀑図		前
7	張路	1464-1538	道院馴鶴図		前
8	王諤	15-16 c	高士濯足図		後
9	鄭文林	16 c 前期	漁童吹笛図		* 3
10	鄭文林	16 c 前期	柳蔭人物図		* 4
11	朱端	16 c 前期	竹石図		後
12	李著	16 c 前期	漁楽図		通
13	文徵明	1470-1559	山水図	弘治15年(1502)	前
14	文徵明	1470-1559	秋光泉声図	嘉靖27年(1548)	後
15	謝時臣	1487-1560-?	華山仙掌図		前
16	宋懋晋	?-1562-?	松下聽泉図	嘉靖41年(1562)	後
17	居節	1527-1586	訪隱図	隆慶5年(1571)	前
18	莫是龍	1539-1587	雲林飛瀑図		後
19	周之冕	?-1542-1606-?	墨梅図	万曆17年(1589)	後
20	項御徴	?-1613-?	雨後山晴図	万曆41年(1613)	前
21	李士達	?-1610-19-?	石湖図	万曆38年(1610)	前
22	張龍章	17 c 前期	穆王駿驥図	万曆31年(1603)	後
23	呉彬	?-1615-?	溪山絶塵図	万曆43年(1615)	前
24	米万鍾	1570-1628	峯巒清逸図	万曆46年(1618)	前
25	米万鍾	1570-1628	寒林訪客図		後
26	張瑞図	1570-1641	行書感遼事作六首	天啓元年(1621)	通
27	丁雲鵬	1547-1628-?	夏山欲雨図	万曆46年(1618)	後
28	丁雲鵬	1547-1628-?	樹下人物図	万曆47年(1619)	前
29	陳元素	?-1606-31-?	竹石図		前
30	呉振	17 c 前期	溪山秋晚図	崇禎2年(1629)	後
31	盛茂燁	?-1607-38-?	梅柳待臘図	崇禎6年(1633)	前
32	盛茂燁	?-1607-38-?	秋山觀瀑図	崇禎6年(1633)	後
33	陳清	明	巴船出峡図		後
34	孫欵	?-1633-42-?	牡丹図		前
35	祝昌	?-1649-?	岩壑風雨図		後
36	陸原	?-1629-53-?	松岸散逸図	崇禎2年(1629)	前
37	朱翰之	?-1646-51-?	三山書院図	順治8年(1651)	後
38	藍瑛	1585-1664	芟目喬松図	崇禎2年(1629)	前
39	藍瑛	1585-1664	蘭竹石図		通
40	袁尚統	1590-1666-?	江寒雁影図	崇禎15年(1642)	後
41	王鐸	1592-1652	六根無塵図	崇禎13年(1640)	前
42	章谷	?-1644-63-?	峨眉飛雪図		後
43	馬元欽	?-1648-54-?	関雲長像	順治5年(1648)	前
44	祁彥佳	1594-1683-?	水亭觀魚図	順治7年(1650)	後
45	文柟	1596-1667	寒江漁隱図	順治4年(1647)	前
46	曹有光	?-1651-69-?	松谿豪飲図		後
47	顧大申	?-1610-73-?	溪山晴翠図	康熙8年(1669)	前
48	龔賢	1599-1689	雲林山居図		後
49	龔賢	1599-1689	雲嶺殘曛図		前
50	万寿祺	1603-1652	高松幽岑図	順治3年(1646)	後
51	方亨咸	?-1647-78-?	臨王羲之七十帖		前
52	陳舒	?-1650-87-?	三山書院図	順治8年(1651)	前

53	石谿 (髡殘)	1612-1675 ?	奇石帖		後
54	法若真	1613-1696	溪山春動圖	康熙12年(1673)	前
55	法若真	1613-1696	草書七律詩		後
56	諸昇	1617-90-?	竹石群禽圖	康熙25年(1686)	前
57	葉蔭生	17c	雨後林光圖		後
58	許友	1620-1663	草書五言律詩		前
59	丁元公	?-1627-1686-?	山水圖	天啓7年(1627)	前
60	孫逸	?-1630-80-?	松溪採芝圖	順治11年(1654)	前
61	羅牧	1622-1691-	江亭遠帆圖	康熙37年(1698)	後
62	羅牧	1622-1691-?	行書題畫詩		前
63	徐枋	1622-1694	竹靈芝圖	康熙18年(1679)	前
64	藍濤	?-1657-91-?	玉堂富貴圖	康熙18年(1679)	後
65	虞沅	?-1681-91-?	菊花小禽圖	康熙30年(1691)	前
66	笪重光	1623-1692	果木圖		後
67	傅眉	1628-1684	草書五律詩		後
68	米漢雯	?-1646-92-?	溪山訪隱圖		前
69	陸暉	?-1685-97-?	江山洲渚圖		前
70	陸暉	?-1685-97-?	南渚春晚圖		後
71	陸暉	?-1685-97-?	江山泛舟圖	康熙36年(1697)	前
72	石濤	1642-1707	杜甫詩意圖冊		後
73	姚宋	1648-1707-?	幽壑高樓圖		後
74	袁江	1662-1735	谿山行旅圖	康熙51年(1712)	後
75	顏嶧	1666-1749-?	荷鄉清夏圖		前
76	顏嶧	1666-1749-?	湖庄急雨圖		後
77	馬元馭	1669-1722	養蚕圖	康熙24年(1685)	前
78	朱倫瀚	1680-1760	聽秋圖		前
79	高鳳翰	1683-1749	晴霞淨艷圖	雍正5年(1727)	後
80	高鳳翰	1683-1749	松山一角圖	雍正12年(1734)	前
81	汪士慎	1686-1759	墨梅圖		前
82	金農	1687-1763	墨梅圖	乾隆23年(1758)	前
83	金農	1687-1763	墨梅圖		後
84	金廷標	?-1767	柳溪散牧圖		後
85	李世倬	1690?-1770-?	听松高士圖		前
86	馬荃	?-1696-1739	紫綬白頭圖	康熙53年(1714)	後
87	李方膺	1695-1755-?	竹石圖	乾隆18年(1753)	前
88	丁敬	1695-1765	墨梅圖	乾隆22年(1757)	後
89	丁觀鵬	?-1726-70-?	阿羅漢像		後
90	袁耀	?-1739-78-?	江村青山圖		前
91	袁瑛	?-1765-85-?	山水圖		後
92	李敬思	18 c	仿石田山水圖		後
93	江衡	?-1800-?	山水圖	嘉慶5年(1800)	後
94	梁同書	1723-1815	行書王士禛七絕詩	乾隆56年(1791)	後
95	張啟	1734-1803	墨梅圖		前
96	黃易	1744-1802	秋溪繫舟圖	嘉慶5年(1800)	前
97	奚岡	1746-1803	春江棹舟圖	乾隆51年(1786)	後
98	湯裨名	?-1804-?	松下仕女圖		前
99	沈宗騫	?-1758-1817-?	山水圖	乾隆33年(1768)	後
100	周笠	?-1804-29-?	皆大歡喜圖	嘉慶9年(1804)	前
101	袁沛	?-1798-1830-?	石湖天鏡圖		後
102	潘思牧	1756-1843-?	楓林霜葉圖	道光8年(1828)	前
103	謝蘭生	1760-1831	山水圖		後
104	張壺	1761-1829	京江勝境圖	道光2年(1822)	後
105	錢杜	1763-1844	仿曹知白蒼松疊嶂圖	嘉慶18年(1813)	前
106	朱昂之	1764-1840-?	山水圖3幅		後
107	朱昂之	1764-1840-?	吟余雅賞圖		前
108	李脩易	?-1828-59-?	梅長春圖	道光27年(1847)	後
109	李脩易	?-1828-59-?	藤牡丹圖	道光27年(1847)	前

110	吳熙載	1799-1870	蟬過別枝圖		前
111	陳元贊	1587-1671	楷書老態詩	康熙9年(1670)	後
112	陳元贊	1587-1671	故山西湖圖		前
113	即非	1616-1671	竹石圖		前
114	謝時中	?-1672-?	夷齊山居圖	康熙11年(1672)	後
115	心越	1639-1695	福祿壽三星圖		前
116	伊孚九	1698-1747-?	山水圖		後
117	大鵬	1691-1774	雪竹石圖		前
118	沈銓	1682-1760-?	雪梅群兔圖	康熙55年(1716)	後
119	高乾	?-1731-?	春王双喜圖		前
120	鄭培	?-1731-?	石榴小禽圖		後
121	何元鼎	18c	侯祿圖		前
122	費漢映	?-1733-58-?	芦雁圖	乾隆23年(1758)	後
123	費漢源	?-1734-56-?	柳塘漁撈圖	乾隆3年(1738)	前
124	王古山	?-1761-?	溪亭閑話圖	乾隆26年(1761)	後
125	梁基	?-1774-87-?	野草蝶圖	乾隆46年(1781)	前
126	方濟	1736-93-?	富士真景圖	乾隆45年(1780)頃	後
127	費晴湖	?-1765-1806-?	傲米友仁山水圖	嘉慶元年(1796)	前
128	江稼圃	?-1804-15-?	清谿重嶺圖	嘉慶10年(1810)	後
129	張崑	1744-1817-?	幽庭竹韻圖	乾隆51年(1786)	前
130	張莘	1744-1817-?	墨梅圖		後
131	程赤城	1745-1811-?	行書文徵明間興詩	乾隆42年(1777)	前
132	陳逸舟	?-1827-50-?	溪山翠嶂圖	道光28年(1848)	後
133	王克三	1822-72-?	墨梅圖	同治元年(1862)	前
134	羅清	?-1870-75-?	山水圖	同治10年(1871)	後
135	羅清	?-1870-75-?	蘭竹石圖	光緒元年(1875)	前
136	王冶梅	1829-89-?	平林烟雨圖	光緒15年(1889)	後
137	張熊	1803-1886	松菊孤鶴圖	同治10年(1871)	前
138	湯祿名	1804-1874	草虫圖		通
139	胡遠	1823-1886	松菊猶存圖	光緒4年(1878)	前
140	胡遠	1823-1886	富春釣台圖	光緒5年(1879)	後
141	虛谷	1823-1896	臨漸江山水圖	光緒14年(1888)	前
142	虛谷	1823-1896	金魚圖	光緒19年(1893)	後
143	朱偁	1826-1900	花卉鳥虫圖冊	光緒7年(1881)	通
144	趙之謙	1829-1884	胡蘆圖	同治11年(1872)	後
145	錢慧安	1833-1911	渡海人物圖		後
146	蒲華	1834-1911	竹蔭高逸圖	光緒20年(1894)	通
147	任薰	1835-1893	睡蓮金魚圖		後
148	陳崇光	1839-1896	群鳥爭鳴圖		前
149	吳滔	1840-1895	著夢閣填詞圖	同治9年(1870)	通
150	任頤	1840-1896	藤竹水仙圖	光緒5年(1879)	後
151	任頤	1840-1896	花鳥圖	同治10年(1871)	前
152	吳昌碩	1844-1927	奇松圖		前
153	吳昌碩	1844-1927	雲根圖	民國元年(1912)	後
154	吳昌碩	1844-1927	雪山飛瀑圖	民國3年(1914)	前
155	吳昌碩	1844-1927	藤花爛漫圖	民國5年(1916)	後
156	吳昌碩	1844-1927	木与石鬪圖		前
157	吳昌碩	1844-1927	水仙圖	民國5年(1916)	前
158	吳昌碩	1844-1927	荷花圖	民國5年(1916)	後
159	吳昌碩	1844-1927	藤花圖		前
160	吳昌碩	1844-1927	牡丹圖	民國5年(1916)	後
161	吳昌碩	1844-1927	淺水蘆花圖	民國10年(1921)	後
162	吳昌碩	1844-1927	孤山高枝圖	民國11年(1922)	前
163	吳邁	1885-1963	篆書散氏盤銘	民國18年(1929)	後
164	吳慶雲	1845-1916	江山暮雲圖	光緒26年(1900)	前
165	高邕	1850-1921	雲霄回鶴圖	民國6年(1917)	前
166	陸恢	1851-1920	浮巒暖翠圖	民國6年(1917)	後

167	倪田	1855-1919	秋塘牧馬図	光緒29年(1903)	前
168	胡佩衡	1862-1962	雨霽風高図		後
169	黃賓虹	1864-1955	黄山後海図		通
170	齊白石	1864-1957	荔枝図		前
171	齊白石	1864-1957	菊群鶏図		後
172	王震	1867-1938	蘇武牧羊図	民国10年(1921)	前
173	王震	1867-1938	樹下撫琴図	民国18年(1929)	後
174	陳衡恪・王雲	1876-1923・1867-1938	古木栖鴉図	民国10年(1921)	前
175	陳衡恪	1876-1923	山水図		後
176	陳年	1877-1970	紅白梅図		前
177	呉徽	1878-1949	松寺鐘声図	民国31年(1942)	後
178	金城	1878-1926	桃櫻怪石図	宣統元年(1909)	前
179	馮超然	1882-1954	百寿図	民国20年(1931)	通
180	陳樹人	1884-1948	孤松寒湖図	民国20年(1931)	後
181	謝公展	1885-1940	菊図		前
182	張聿光	1885-1968	春苑狸奴図		後
183	王雲	1888-1934	秋海棠図	民国16年(1927)	通
184	于悲蘭	1889-1959	柑子小禽図	民国28年(1939)	通
185	賀天健	1890-1977	柳橋漁唱図	1952年	前
186	王个簃	1892-1988	柏寿図		後
187	鄭午昌	1894-1952	千山雲烟図	民国15年(1926)	前
188	俞劍華	1895-1979	雪景山水図	民国23年(1934)	後
189	溥儒	1896-1963	春風得意図		前
190	李苦禪	1899-1983	荷蟹図	民国21年(1932)	後
191	張大千	1899-1983	水殿清風図	民国42年(1953)	後
192	張大千	1899-1983	松蔭思賢図		前
193	錢松岳	1899-1985	漆湖図	民国20年(1931)	前
194	王雪濤	1903-1982	鶉図	民国29年(1940)	後
195	傅抱石	1904-1965	後赤壁図	1964年	前
196	趙少昂	1904-1998	香港真景図	民国30年(1941)	通
197	陸儼少	1909-1993	雁蕩山水図		後
198	呉青霞	1910-2008	万紫千紅図	1960年	前
199	宋文治	1919-1999	山水図扇面	1954年	通
200	程十髮	1921-2007	鶴帰来図	1985年	後

【展示期間】 前：前期(7/28-8/12) 後：後期(8/14-9/2) 通：通期(卷替もあり)

* 1 : 7/28-29 * 2 : 7/31-8/12 * 3 : 8/7-12 * 4 : 7/28-8/5

橋本末吉について

大阪市立美術館の皆さまへ、このたびは祖父のコレクションにつきまして盛大な展覧会を開催して頂き感謝を致します。また祖父のコレクションを長年にお預かり頂き、数々の展覧会にご協力をして頂いている松濤美術館の皆様には厚くお礼を申し上げます。

私は小学一年まで祖父の家で育ち、高校までは自転車で四十分ほどのところにおりましたので、祖父からすれば、一番近い孫だったと思います。

本日の公演のお話があり、娘である叔母たちにどのような父親であつたかを聞いたところ、「ともかく怖かった」とのことでした。ちゃぶ台をひっくり返したり、なにか暴力的だったという話ではありません。家の中でも紳士然とした姿勢を崩さず凛として、当然、私たちから自然と敬語が出てくるような存在でした。今の時代に失われている父親としての威厳があり、そして一家の長としての品格がありました。東京生まれで、ながく大阪に居住しても、関西弁にはならず、いつも標準語で話すことは、その毅然とした雰囲気より一層に醸しだしていたかも知れません。

物静かで適切な時にだけ何か事を発する。それでいて情熱的なも

橋 本 太 乙

のを内に秘めている。それが私たちからみた祖父のイメージです。それから全体を見る力、将来を見据える力は大きかったと思います。会話はいつもたんたんとしていましたが、関東大震災、第二次世界大戦という大混乱の事態や、明治、大正、昭和と、昭和も戦前、戦後、高度成長期、など価値観が大きく変わる時代を生きており、私たちが知らなければならぬ体験話は尽きることがありませんでした。

亡くなるまで新短歌会の最高顧問に就いていましたが、大学生の時代から斎藤茂吉先生に指し、歌人でもある祖父の観察眼とそれを人に伝える力について、こんな話があります。庭の雪柳の枝にメジロが止まる事がありました。私の横で祖父が、「風もないのに枝が大きく垂れ下がった、何かと思つたら小鳥がとまったのだなあ。小鳥の命の重さを感じる」と歌を詠んでくれました。その「命の重さを感じる」の一言で私にとって一生忘れられない光景となりました。

気にしなければ昨日の続きのように何事もなく過ぎていく今日、その今日の今を持ち前の感性で精いっぱい感じていたのではと思

ます。年をとってからも日曜日には学生さんが絵を観に来る、京都に出れば骨董屋さんが出物を出してくる、研究者の方々との交流で新しい最先端の事実を知ること、あるいはその出物を買いか買わないかを悩んだりすることも（歳をとってからも）毎日がわくわくの人生だったかもしれません。そのわくわくの緊張のなかで、真剣勝負を常にしていたように思います。

祖父は後々、日本アルコール販売という（専売公社の税金の納める為の会社）、半官半民の会社の社長になるのですが、小さい頃は体が弱く、ぜんそく持ちで中学の二年の頃はほとんど学校を休んでいたそうです。テレビの無い時代、寝床で息苦しいのを抑える為、うつぶせになって本を読んだり、新聞をみだりの生活だったそうです。（このころ漱石全集も読破したそうです）。毎日毎日、新聞を見ている中で、読者から短歌を寄せるコーナーがあり、それに応募したところ、何回目かに、なんと金賞が取れたそうです。

大人の人が千人以上投稿する中で、中学生の祖父の作品が選ばれた。それで祖父の人生は大きく変わったとのことでした。人間、一つでも自信がつくと人生が変わるということです。たった一つのことでもいいから自信をもつことが大切だということでした。

大学に入るころには水泳のコーチが出来るくらいに体も丈夫になり、ぜんそくも出なくなっていたそうです。その学生時代、かるたの選手もしていました。私が高校とき、百人一首の相手をしてもらったことがあります。一枚も取れませんでした。一枚もです。七十をすぎた祖父を相手に高校生の私が取れませんでした。小さいころからトランプなどの相手してもらっていましたが、相手が幼ないからといって手を抜くことはなく、全力で相手をし、当然、私が負

けるわけですが、自分の手の内（作戦）も教えてくれました。私のどこが悪いのか良く分かり、ゲームには技術とコツ（感）と作戦があることを知りました。後々、「高槻スクール」と呼ばれる集まりでも若い人に負けまいと、一生懸命に勉強をし、祖父なりに全力で対応をしていたのではと思います。

祖父は大学の卒業後、最初は女子大の先生でした。二年して、伯父の口利きで大蔵省に入ります。大蔵省当時に先輩官僚からいじめられた話があります。私は祖父からサラリーマンをしていけば必ず三回、一回が三年間続かたちで胃が痛くなるような事があると言われました。皆様もそういう時期があったと思います。これは先にそうやって聞いておけば、三回はだれでも有るのだ、そして始まったら三年は続くのだと思ってしまうと、そら始まった、よしこれが三年続くのだなど覚悟が出来ます。私にとって社会人の前準備として有りがたい言葉でした。その時どうしたのかと尋ねたことがあります。最初の時は「絶対にそいつより偉くなってやる」と思ったそうです。やはりここでも物腰の静かさからは想像できない熱い血が流れていたと思います。

やがて支店長になりますが、その支店長時代にとんでもない失態をします。九州に赴任した時、前任者から全く引継ぎも無く、そして支店内で教えてくれるも職員もなく、あるとき監査が入り自分が行っていたことが間違っていた事に気がつくのです。

もう年末が迫っており、どうしようもありません。でも自分の責任ですから、独りで帳簿の書き直しをしていたら、まずは事務の女性が残ってお茶を入れてくれたそうです。やがて守衛さんがストーブの石炭をくべてくれたりと、そして大晦日には何人かの職員の方



橋本氏

がお正月休みを返上して手伝ってくれたそうです。前の支店長はあまり良い人ではなかったようです。職員の方々は次はどんな人が支店長なのかと様子見でほったらかしにしておいたところ、結局、自分で責任を取り始めたので、人柄がわかり、手伝いにまわってくれたのです。お正月休みを返上した皆の手伝いのお陰でお正月明けには全ての書類が書き直せ、ことなきを得、それ以来、支店の団結力は上がったそうです。

こういう話は私自身がサラリーマンとして自分の力ではどうしようもないことが起こる事、あるいは起こってしまったら何をしなければならぬかが分かり、心の準備ができたことで大変に役に立ちました。

私の長女が生まれた年に理不尽な事が実際に私に起こり、会社を

辞めることになり、その前に祖父に相談に行きました。私の主張は、自分が悪いことをしていないのになぜ辞めなければいけないのか？でしたが、その時の祖父の言葉が（今日のサラリーマンとして大切な言葉の二つ目ですが）「名より実を取れ」（名誉より現実をとれ）でした。

自分が正しいとか、相手のここが間違っているとか、二十代で論争するより、そのことで退職金はいくらになるとか、その元手で次のことは出来るのか？等、今後どうするかを考えた方が良いという回答でした。

確かにもめてエネルギーと時間を費やすより退職金を上げる交渉をした方が良いに違いありません。若い時は理不尽に耐えられないものですが、祖父のアドバイスの通りに考え、円満退職の形を取り、数割、退職金を乗せて辞めることが出来ました。心の切り替えがうまくでき、時間が無駄になりませんでした。後々も色々なトラブルを経験しますが、祖父のあの言葉は大変に役に立っております。

話を祖父の歩いた道にもどして、昭和十二年に日本は戦争の準備に入り、石油の備蓄を始めます。アルコールを専売にする為に政府は動きだします。

誰か通産省側で祖父の事を知っていた方がおられたのでしょうか、祖父は通産省へ引き抜かれることになり、大阪支店を任せられました。そして戦争へ突入です。戦争になってしまうと本社にお伺いを立てていることができなくなり、（現場主体で）全て支店長決済となります。大阪以西、九州までを販売領域としていますので、広島、小倉とあり、本社の何倍もの取り扱い量になったそうです。警察も工場もガソリンやアルコールを必要とし、そして限られた量での配給

となりますから、支店長の決済はかなりちやほやされる状態だったそうです。

軍の方が祖母の家族の為に防空壕を掘ってくれたり、警察から配給制だったコメや砂糖などが家に届いてしまい、警察のやっていることの矛盾や皆さまご存じの大本営発表のうそなど、祖父は世の中の裏側と表側の違いを目のあたりに知る事になります。

あるとき、松下電工から多量のニス（接着剤）の発注がくるようになり、どういふことかと工場まで見に行ったそうです。かの有名なゼロ戦のプロペラは木製で、型紙に合わせて木を切りぬき何枚も貼り合わせてプロペラの形にしていのですが、完成し検査に通るのは百枚のうち二枚か三枚だそうです。あの素晴らしいエンジンの性能を引き出していたプロペラの精度というのはそれくらいに凄いものだったようです。資材のほとんどが不良品扱いになり、大量のアルコールが無くなる。これは備蓄を始めた頃には想像も出来ない量だったようです。戦争というものはそういうものかもしれません。

この時点で日本は負けるなと思ったそうです。具体的には私の母方の叔母に国に提供しようとしていた結婚指輪を「もうすぐ戦争が終わるから少し待ちなさい」と示唆し、お陰で叔母は亡くなるまでその指輪をはめていることが出来、指輪をみせて「あなたのおじいさんのお陰よ」と笑顔で言っていました。

祖父の「全体をみる」と、「将来を見据える」という才能はもともと有ったにせよ、戦争中の体験により、より確実な才能になったのではないかと思います。

戦後中国の絵を買い始めるのですが、その頃、明清の絵というものは全く研究は進んでおらず、骨董屋さんで見ても誰だかわからな

い（文徴明くらいはわかりますが）、当然に価格も安い画家が大勢いた、というところに入っていきます。

簡単な比較の話ですが、中国はいつの時代であってもヨーロッパ全土の人口より多く、歴史は五千年以上と長く、皇帝も出ている、金持ちがいるということになると、確率論的にゴッホやセザンヌあるいはダビンチクラスの画家が出てもおかしくない訳で、実際には出ていますし、作品もあります。それどころかもっと素晴らしいものが沢山あります。でも中国の人ですら画家の名前が言えないのが普通です。

祖父が私に言った言葉で「中国は、今は共産国だが、お隣りの国だから仲良くしておいた方が良く、江戸時代までは日本の先生だったのだから。」

つまり仲良くすること＝良く学ぶ事をすれば相手のこともわかるし仲良くもなれる。もともとは仲が良かったのだから、これは中華思想をとっているものを理解できれば仲良くもなれる。という話でもあります。先程の時代と評価の話ですが、大きく歴史をみると、その六〇年代の日本の中国に対する評価が低すぎる訳で、祖父はその当時から今の中国になることをしっかりと予想していました。

さて、戦後、アメリカによってアルコール専売は二つの会社に分けられますが、やがてアメリカの統治の終結とともに分けられていた二つの会社の一つになります。日本アルコール販売という国に税金を納める会社が生まれる訳です。祖父は大阪支店長でしたが、一人代表取締役を置かない、四人常務制の発足となります。そこで全社員の投票が行われました。数からいえば社員数の多い東京の役員に決まるはずだったのですが、東京本店の女性の取りまとめ役だっ

た有賀さんが女性票をまとめて大阪支店の祖父に入れた為、祖父が最初の投票で過半数を得てトップ当選となりました。このあたりも何か粋な（チャーミングな）慶応ボーイらしい雰囲気を感じて女子社員にみせていて、女子票が集まり、祖父らしいなと思います。

私の妹がまだ幼かったころ、良くからかっていましたが、その孫たちに、ちょっとお茶目なおじいちゃんをすることがありました。厳格な祖父のイメージもありますが、娘や息子には見せない孫にだけ見せた、たぶんそのような面も持ち合わせていたのだと思います。ですから女性社員票を獲得できたのではと思います。

このことは、祖父にとっても晴天の霹靂で驚いたそうです。こうして四十代の若い常務の誕生となり、自分で決めた取締役七十歳定年までの期間、歴代の代表者のなかで最も長く日本アルコール販売の代表者である常務を務めることになりました。

長くいたことから部下の方々も多く、祖父母たちが歳をとってからは、部下であった方が、掃除に来て頂いたり、お墓の面倒を見て頂いたり、毎週のように人が訪れ、挨拶に来られる日を過ごすことになりました。祖父は入社に立ち会ったり面接に立ち会ったりで、それきりの方々もなぜか定年の年になるとご挨拶に来られました。昔のしきたりとはいえ、祖父の毎週水曜日の日課になっていました。私も引退した後は見習いたいですが、残念ながら実力的にも人格的にも無理なようです。

祖父は七十歳になったとき、スパッと仕事から離れ、その後一切、会社には顔を出しませんでした。かってから、会社のOBが「みんな元氣か」なんて会社に尋ねてくる姿をみつともないと思っていたらしく、ましてや今の社長にアドバイスするなどもつてのほか、と

言っていました。

私に対してもサラリーマンとしての姿勢は説明してもらいましたが、かつての仕事の自慢話は一切ありませんでした。ただ運というものに大きく影響された話は聞きました。

その一つは先ほどの代表者を決める社員投票の話ですが、もう一つは昭和二十五年ころ国に対して税金の滞納という不祥事を会社はしてしまうのです。その時は検察が入り自分の部下も含めて祖父を除くほぼ全員が捕まります。事実、祖父は東京でしているお金の運用について注意もし、止める言葉は言っているのですが、検察は全員を捕まえる気でいますから祖父の部屋にも入って来ます。ようは皆さんがテレビなどで良く見る「国税局が入りました」のあの場面です。ではなぜ常務（要するにトップ）である祖父が捕まらなかったのでしょうか？

中には祖父の部下で会計責任者の遠藤さんという方がおられましたが、東北出身の非常にまじめな方で検察の追及に一切応じず最後まで「知りません。」を通した方が、一番刑が重く、恩給まで無くしてしまいました。一方この時、実際のお金を焦げ付かした東京の常務はあっさり自供し、遠藤さんより軽い刑になりました。大変な事件でしたが、国税が入ったとき、祖父のとなりの一言が国税の人たちに逆に駄目だと思わせた事や、その時に非常に機転のきく事務の女性が事件とは関係が無いにしても他の問題を含む書類を持ち出した事や、結果として祖父の部屋からは絵の本しか出て来ず、違反行為の数字の一つでも出れば引つ張れたのが全く出ないという事態から、検察が撤退せざるを得ない結果だったという話を聞きました。

実際の話ですから結構真に迫り私の記憶の中では思い出深い祖父の話になっています。国税局は会社に入ると同時に自宅にも入ります。このような時、祖母は勿論のことまだ学生であった父もしっかりと対応しておりました。先ほどの九州支店の時と同様に全ての人、会社では清掃員まで一丸となって大阪支社を守ろうと、家では女性である母とともに息子が頑張ったそうです。

別の話ですが、このように家族が一丸となって問題を解決する話はどう一つあります。大きな問題に直面する時、本能的に息子たちは家族を守り、そのことをしている祖父に全力でサポートします。とんでもない大きな力が結集されることを我が家は経験しています。私は家族や親戚を思う時、そうやって結束して来たのだなあと祖父が家族に対して行ってきたことから、思います。後ほどお話しするコレクションを守るということですが、そういうこと（使命）だと思っています。

結果としては、大阪支社は最初から関与もしておらず、東京支社のみを使い込みでした。祖父の部屋から何も出ず、祖父だけが連帯責任から免れ、祖父以外の常務全てが捕まるとい事態から、その後、祖父が実質の代表者として長らく務めた事、そして、そのことは祖父の実力ではなく全くの運であった事を祖父から聞いています。

絵の本しか常務室に置いてなかったとは笑いですが、祖父から次の言葉を頂いたことがあります。

「代表者というものは、仕事はしなくて良い。優秀な部下を信じて任せておけば良い。但しその優秀な部下がどうしましようかと聞いて来た時は右とか左とかはっきりと指示しなければならない。そ

の為には毎日、新聞を良く読み、常に外をみて世の中がどうなっているのか知っていなければならない。そうでなければ正しい判断はできないから」という教えです。私はもう少しで六十です。でも困ったとき祖父だったらどうするかな？と考えます。そして決断します。

決断という言葉で次の大切な祖父のアドバイスを思い出します。

「人生には誰でもどんな人でも三度はチャンスがある。三度ともチャンスをものにした人とそうでない人は大きく人生は違ってくる。」これは祖父の実体験から来ている言葉です。この言葉には続きがあって、「三度のチャンスを全く気がつかない人もいる（おれはついていないとぼやいている）。また気がついててもそれを掴めない人もいる。必ずあるからお前もその準備を怠らないように」と。

つまりチャンスに気がつかないのはどうしようありませんが、気がついていて掴めないことほど悔しいことはありません。チャンスが来た時に資金が無くて掴めなかったり、英語が出来なくて交渉出来なかったりと色々なケースがありますから、必ずあるから掴む為の努力、英語は出来た方が良く、お金も日頃の生活費を詰めてでも貯めておいた方が良くということです。あともう一つ、インターナショナルな技術を身につけておきなさいというのがあります。例えば中国の絵画はアジアを代表するインターナショナルの芸術だから、それを理解するということは、しいてはアメリカでもヨーロッパでも通用するということだと。絵は言語ではありませんからその時点でインターナショナル芸術ですが、日本画より尚インターナショナルだということです。

また話を祖父の話に戻して、一九七〇年、定年とともに祖父は一

つの大きな行動に出ます。まさに次の時代を見据えての行動です。私が中学を卒業するその年、何が起ったのでしょうか？

その経緯に至る少し前からの話をします。祖父のコレクションの根幹は桑名鉄城先生のコレクションの買い取りから始まります。祖父が私に言った言葉ですが、「住友さんのようにお金が有る訳ではないので、三ヶ月に一点とか、そんなに揃うもので無い」。

関西中国書画コレクション研究会の話によると住友さんも無尽蔵にお金があった訳でなく、苦勞して買っておられたとのことでした。良いコレクションとは購入の段階での金銭的、苦勞話があるのではないかと思えます。そうやって少しづつコレクションの根幹が出来ていくわけですが、ここで面白いのは住友寛一さんと祖父の趣味、嗜好が見えてくるのです。安晩帖に代表される粹な絵に住友さんは惹かれるのに対して祖父は住友さんが手を付けなかった鄭顛仙【**図1**】を購入します。

絵の価値についてこういう事を教わりました。

「絵の価値とは見る人の心をどれくらい揺さぶるかで判断せよ。」

心地良い爽やかな気分させる絵もあれば、見るだけで胸糞悪いドロドロしたものを感ずる絵もあります。鄭顛仙の絵はまさに後者です。自分の心の震動幅を絵の価値として認めよ、とのこと、これは骨董屋さんの店先でも、美術館などで沢山の絵を観るときでも、大変に役立つ言葉です。趣味、趣向より、或いは名前より、これは何だろうと思わせる気持ち、この感覚が大切だということです。

日本は多くの浙派の絵を保有しています。古いお寺にいけば大概あります。ところが文人画に比べれば格段に安い、中国では身分の高い人の絵が高く評価される為、その中国に倣って日本でも同じ評

価が下されています。しかし心が揺さぶられる大きさでみれば、決して職業画家も文人画には劣りませんし、技術力が高い分、これでもか、これでもか、といった部分があります。

画家の人格と絵のときは別であるということです。後世、遺民画家は高く評価され、二君に使えるような画家は低く見られますが、絵の出来とは別である、という祖父なりの割りきった見方です。

祖父がそのドロドロした感情を良しとしたかどうかは定かではありませんが、早い段階で絵の価値を認めたのは事実で、まだ世界的に認めてはいない分野の開拓者となりました。やがてこのことは東大教授の鈴木敬先生の研究で明らかにされます。世界に誇る代表作に恵まれたのは、勿論、桑名コレクションありきですが、そこから浙派の絵を抜き出したのは祖父の先見性と全体をみる価値観だったと思います。

誰もやっていないマイナーなところを見よ、というのではなく、誰も気が付いていない大切なものを見よということです。これが先

図1 鄭顛仙「漁童吹笛図」 橋本コレクション



ほどのチャンスがあるが、気が付くか付かないかの差のように思います。

そしてこの浙派の絵は鈴木敬先生と祖父をつなぎ、次の大切な人たち古原宏伸先生へとつないでいきます。鈴木先生は石鋭の絵【**図2**】を文化財指定することにご尽力され、祖父のコレクションを表舞台へと引き出していきます。そして古原先生は沢山の若い研究者を高槻へと案内されます。橋本コレクションはその先生の方々の後押しが無くては成り立ちません。本当に今日の日を迎えた出会いです。

「文化財を持つものは公開の義務がある。」祖父から私への使命です。祖父はかねてからお茶の世界で宋元の絵を密かに仲間内だけで見せあつてる事に関して、文化財ということから、おかしいという念をもっていました。人を幸せにするとはまでは言いませんが、今の人が学び生かしてこそ文化であると、その為にはやはり研究を阻害するようなことは良くないと思っていました。

一方、鈴木先生のほうでも祖父のような個人コレクターが作品を持っているが、研究者は見ることもできない、所在をもわからない、これでは研究をおし進めることが出来ないと思っておられました。その後、ご自身のご苦労から、次の時代の研究者の為に、作品の場所とどんな作品か写真資料を撮ることによって完成させた『中国絵画総合図録』の発行となります。これは全く方向を同じくし、その考えの一致によって祖父のコレクションが多くの研究者に知れ渡ることになりました。

具体的には先ほどの一九七〇年は万国博覧会の年、万博美術館において七十点もの作品を出展する運びとなります。また東京国立博



図2 石鋭「探花図」 橋本コレクション

物館におられた鈴木先生の関係から、東洋館にも毎年貸出展示するというのも、この前後から始まっています。

それまで宋元画ばかりがもてはやされましたが、しかし宋元画は数が少なくだいたいは研究し尽くされていました。鈴木先生の「浙派の研究」はある意味、だれも手を付けていない分野への第一歩だったように思います。宋元画と違い多量の作品群が眠っているとこるへ、いよいよスポットが当たる時代が来た訳です。その少し前中国は文化大革命の真っ最中、大量の文物が放出され玉石混合の形で日本に押し寄せて流れ着いてきます。

一般庶民が買える値段で玉石混合の中から「これは」と思うものを引きだしてくる。そして「これは何だ！」と調べる。この面白さに気が付き始めたということ。これは研究者と現物 つまり持っているコレクターとが両輪でできることで、ここから一気に研究と収集は熱を帯びてきます。

そして祖父はコレクションを加速度的に増やしていきます。祖父は色々な物を集めていて大体様子が分かると次に興味を示す人間だったようですが、ここでまた祖父の言葉ですが、「中国だけはいくらやってもわからん。だから（収集が）終わらない」と最後まで買いつけていました。全体を見る力、先を見る力が優れている祖父でも中国の奥深さには歯が立たなかつたということ。です。

その間の財源としては茶道具や古銭、大判小判、或いは焼き物が売られ中国絵画へと変わっていきます。その頃の祖父の話ですが、「鉄釜や焼き物はある程度（六十から百くらい）集めたら大体分かるようになる。ところが中国絵画だけは集めても集めても分からない物がいっぱい出てくる。「中国という国は大きいなあ」と。」

結局、中国絵画以外の骨董はすべて手放し、中国絵画へと変わりました。硯や香炉も玉も全て手放します。祖父の潔さがここでも出てきます。変革の時代を生きていく時、この潔さは見習わなければと思います。会社のことも新短歌のことも七十とともにスパッと切り、一心に中国絵画に走ったことが今の結果だと思えます。この時代、コレクションの後継者という文化を担う人たちを意識していたのは事実です。

古原先生が率いる曾布川先生、山岡先生へと次の先駆者の時代が始まっていました。なかでも山岡先生は研究者でもおられ収集もされるという、祖父とはコレクター仲間でもあり、大きなライバルでもありました。買うほうでも刺激のし合う良い仲間の出会いがますます祖父の熱き血を燃えさせたようです。見る目の天分を持たれてる尾崎先生との出会いは本当に喜んでいました。仲間が増えること、そしてその買う方の仲間は池田先生、浅野先生へと、もつと若い人たちへと広がっていきます。まさに今日お集まりの方々共感される日々が七〇年代から始まり八〇年代と続きます。味岡先生の参画もあり、来船、近現代と興奮の中での収集と発見が祖父のコレクションに更なる柱を増やしていきます。

古原先生は毎月のように十数人の学生さんを連れ、高槻での勉強会を促進され、その影響を大きく広げられました。考えてみれば、中国の国外において日本は中国絵画の最大の保有国であり、また東京、京都、大阪等々、中国の北京、南京、上海に比べれば非常にコンパクトな地域にあり、勉強が非常にしやすい国であります。

皆で築かれたものですが、研究者、コレクター、そして骨董店と一緒にあって楽しみ、興奮もし、刺激もしあい、良き時間を過ごす

こと。これこそ真の幸せではないかと思えます。その昔、皇帝や貴族でしか味わえなかった時間をいま共有できることは本当に喜ばしいことで、このような事を今後も続けられればと思います。祖父の言葉で、文化は身近にあつてこそ文化である。そのまさに実感の集まりでした。

祖父から、「背伸びして手を伸ばして 少し足りないところくらいを狙うと（目標にすると）いいよ（目が肥えるよ）」と言われました。具体的には骨董品を買う時、ひと月の給与より少し高いくらいのを探すといいよ、ということでした。それならば私にも出来ると少し買いましたが、仕事が能力以上の事になってしまい、いまは買っていません。

・骨董屋さんで作品を見せられて、目の前で辞書を引く人はいないだろうし、また引いて直ぐに分かるような画家は骨董屋さんでも値段が分かっている、従つて感性で見なければならぬ。

・「名より実を取れ」は別のところで出てきましたが、収集においても同じです。「名で買うな」

・自分が代表作を知っていること、そしてそこからどれくらい離れているかで判断すること。

・プライスマーカーで無ければならない。≡自分で値段が付けなければ無ければならない。≡自分で値段が付けなければ無ければならない。

・筆致を見よ！偽物を描く人は本物の形をまねようとします。従つて筆の速度が遅くなります。

・骨董屋さんの店頭は何日も出ているものは大したものではない、良い絵は出たら直ぐに人目について売れてしまうものだ。だから毎日でも巡回をしたほうがよい。また弘法さんの市のようなところ

で尾崎先生のように良いものを見つけ来られたり、百貨店のカレンダーと呼ばれる重ねて掛けてあるものから見ついたり、と油断は禁物です。情報収集も兼ねて毎日、骨董屋さん巡りをします。

・一千万円もするものは、買った方がその絵の価値を知らなくても一千万円の物の扱いはする。怖いのは四百年も経っているのに痛んでいたたり、名前が知られていなかったりで、安い値段（五万円くらいで）売られている物についてです。これが資料的価値で必要であつたり、あるいは人の心を打つもの（芸術度が高い）であればお金が無くても買え、と言われました。なぜならば何も知らずに五万円で買ってしまった人はそのものに対し、五万円の扱いしかしない。当然、次の時代には残りません。

・自然に見えるものは良い絵である。鳥が描かれていて失速してしまふようなものは駄目、滝の絵であれば漠々と滝の音が聞こえて来なくてはいけない。実は絵を見るのでなく自然を良く観ることなんです。そうすれば良い絵が見えてきます。何元鼎【**図3**】の左側の鹿の絵で写しは右足が前になっている。それだけで、鹿が足をつっぱているようになり草を食べられない。

・京都の骨董屋さんは目が高い。これだけのコレクションを揃えるのに、祖父は一度も大陸に行ったことはありません。台湾での虚谷の一点を除いては、全て国内で買っています。

・本物・偽物。何元鼎は本物。偽物作りがそれだけの腕があれば沈南蘋と書くだろう。

・あくまでも紙に墨が塗ったくったものであることを忘れるな！つまり絵では食えない。

・喫茶店のマッチの収集と同じ労力で出来る。但し文化財を扱って

いると人は勝手に高尚だと思う

祖父は最初に意識したかどうかは不明ですが、コレクションを形成するにあたり、柱になるものが必要です。何かコレクションの名前を言った時に思い浮かぶ作品が有ること。それがもし世界に他を許さない何かであれば、数ではなく、それだけでコレクションは形成していけるものだと思います。祖父は桑名コレクションからその柱になるものを買取れたことが良かったと思いますし、それが祖父が持つ運かもしれません。住友さんのところと分かれていくわけですが、ここでコレクターの主旨、趣味とかが伺えます。

資料ノートを充実させていくこと、持っけていても豚に真珠では話にならない。それが何なのか知り、世の中に伝えていくべきこと。これには曾布川先生をはじめ、高槻に来られる研究者の方々がおられてこそ成り立っています。祖父はいつも教えて頂く資料に感激していました。なぜならば祖父自身も自分のノートを充実させる為にわかる範囲での画人伝など書き写していたのです。曾布川先生や味岡先生がそれ以上の資料を提出されますが、祖父はやはりどうやって調べたのだろうと敬服もしておりました。そして先生の方々から来る資料で自分のノートが充実してくることに大いなる満足をしていました。

祖父は次のような意思を持っておりました。

・コレクションは集まっているから「コレクション」である。離散させてはいけない。

・文化財は公開の義務あり。研究者に広く見せるとともに、関連資料の提出が出来るように無ければならない。(また見に来た研究者の方々に次なるヒントの作品を提示するのも持ち主の仕事だ

と。)

公開すると間違いなく物は痛みます。保護する観点から、その維持費は馬鹿になりません。そういうときに修復費用の高さで躊躇している、出てくる言葉が「これで百年持ちますから、次の時代に伝えることができますから。」そうなんです。中国といえど歴史上しょっちゅう内戦をしています。戦火の中、誰かがこの絵は大事だからと、命を掛けて守ってきたから、今に現存をしている訳です。昔はこの「命を掛けて」の意味が分かりませんでした。しかし今は守らなければならない物が見えます。

保護をする、研究をする。「それが出来ない奴は持つ資格なし。」は祖父の言葉です。

皆さまの中にはこういう大きな展覧会をすればさぞお金が頂けるだろうとお思いの方もおられるかも知れませんが、公開の義務のみです。

図3 何元鼎「侯禄図」 橋本コレクション



・コレクションは勉強をする人のところにあるべきもの

個人コレクションですと維持、管理の問題が非常に大きな課題となりますが、祖父のコレクションは有難いことに松濤美術館が寄託を引き受けて下さいました。そして祖父が持つ運だと思いますが、何よりも幸せなことに味岡先生との出会いです。味岡先生は本当に祖父の意志を良くくんで頂き、橋本コレクションの展覧会を七回以上、開催され、そのたびに資料を完璧なほど揃えられ、次の時代を拓いてくれました。

祖父の言葉として、展覧会は一ヶ月くらいで終わるが図録は十年も二十年も使うので図録の作成に力を入れるようにとのことでしたが、祖父の意志通り充実した図録を作って頂きました。前述のように、コレクションの柱でもある来船や近現代など先駆的な作品群があり、図録に掲載された味岡先生の画人解説はまさにバイブルです。各研究者の皆さまへのサポートをはじめ祖父のコレクションの管理につきまして、なみなみならぬご配慮とご苦勞をされており、感謝の念が絶えません。祖父のコレクションは味岡先生を無くしては存在し得ません。本当に感謝しております。

コレクションの全てを私が勉強をすれば良いと東京の松濤美術館に寄託したあと、がらんとした蔵に夕日を浴びて独りたたずむ祖父の姿は本当にさびしそうだたと聞きます。もちろん床の間にも何も残ってはいません。すべてのものはすでに中国絵画に変わっています。何十年にもわたる苦勞の存在、本当に手を掛け続けた存在、(まとめて買ったことはありません)そして皆さんの高槻での楽しい思い出の元を、祖父の手元から全く無くしてしまい、本当に祖父に申し訳なく思います。そこまでして祖父が残したかったものを今

一度考えて、今日のお話を終わりたいと思います。

(橋本末吉氏御令孫)